

【調査報告】

経営系基礎演習のゼミ活動による地域貢献の可能性について

The Possibility of Contributing to the Local Area in the “Business Management Systems Basic Seminar”

大城 美樹雄

要旨

これは、名桜大学国際学群経営専攻で2年次対象に展開されている経営系基礎演習での、あるゼミ活動による地域貢献について、まとめられた事例報告である。当然のことであるが、学生は学生である前に地域で暮らす住民でもある。その住民の一人として地域で日々暮らす中で、その地域の抱える問題について、住民とは別のアプローチである学生という立場で、何ができ、どう貢献できるのか、について正課内活動としてのゼミ活動を通して学んだことをまとめた。名桜大学が位置する名護市には55の地区が存在するが、中には急激に人口が増え続ける地域もあり、その一つである宇茂佐区が今回の舞台である。この報告を通して、人口増加による諸問題、特に公共施設（公園等）のゴミ問題についての解決となるよう、他の地域のモデルとなれば幸いである。

キーワード：経営系基礎演習、地域貢献、学群制度、PDCAサイクル、ゼミ活動

I 名桜大学の学群制度について

今回のゼミ活動による地域貢献について述べる前に、まず、名桜大学の学群制度について説明する必要がある。学群制度と学部制度との大きな違いは、入学する際に、学群制度の学生は自分の学系（専攻）を決定せずに入学するという点である。学部制度であれば、たとえば、経営学科を受験し、合格すれば経営学科の学生となる。ちなみに、学部にあたるのが学群、学科にあたるのが学系となる。また、学群制度の場合、受験生は「名桜大学国際学群」を受験し、合格すれば2か年間は、どの学系にも属しない学群生として過ごす。学生証や申請書類には「所属：国際学群」となる。そして、3年次に上がる際に初めて自分の進むべき学系を決め、その学系の教員のゼミに所属するのである。ただし、3年次に進む条件として60単位を修得しておくことなど、細かい基準があるがここでは割愛する。要するに、2か年間は、どの学科・専攻にも属せず専ら学群生として、「名桜型リベラルアーツ」を徹底して教育されるのである⁽¹⁾。

II 経営系基礎演習でのゼミ活動について

学群制度での2年次は、学生自身が進みたい専攻と、

他に興味があり迷っている専攻とを、前期と後期に分けて1専攻ずつ合計2専攻希望し、必修科目として履修しなければならない。現在、名桜大学国際学群には1つの学系があり、その学系には次の6つの専攻がある。(1)国際文化専攻、(2)語学教育専攻、(3)経営専攻、(4)情報システムズ専攻、(5)診療情報管理専攻、(6)観光産業専攻となっている。その中の一つである経営専攻が提供する「経営系基礎演習」では、全受講生を担当教員数で除し、ゼミ配置を行なっている。その際、以前は学生の受講希望ゼミを申請させ調整していたが、人数にバラツキができ、さらに必ずしも全員が第1希望のゼミに配置されるということにはならないので、現在は、機械的に人数を揃えてゼミ配置している。また、学生には希望とは違うゼミに配属されても自分の能力を最大限発揮しゼミ活動に貢献するよう指導している。たとえば実社会においては、社員が自分の希望する部署のみに配置される、または、好きな仕事だけをこなすということは有り得ず、自分の希望とは違う部署・仕事でも進んで参加し、組織の中で居場所を作り自分の能力をいかに発揮して会社に貢献しなければならない。この自分の思い通りにならない「不条理への耐性」が今の学生には著しく欠落しているように見受けられるので、このゼミ配置への対応は、特に大事なことで学生には説明している。2年次対象

のオープンゼミと称して、興味のあるゼミには直接ゼミ開講時に訪問して見学できる制度を確保してあるので、この基礎演習におけるゼミ配置は実社会での予行演習と位置づけている。ただし、単純に機械的に処理するのではなく、できるだけゼミ間のバランスが良くなるように、性別・沖縄県内出身者数と県外出身者数・専攻への第一希望と第二希望などの要素を考慮し配置している。平成26年度前期の場合、担当教員6人に対し、全受講者数が61人だったので、担当教員一人当たり約10人のゼミを受け持つこととなった。

また、年度ごとに共通課題を設定し、その共通課題を基に各ゼミの個別テーマを設定し、独自にゼミ活動を展開する。そして、講義の最終日に発表会を開催し、自分たちの成果物を、パワーポイントを活用し口頭発表しなければならない。過去の共通課題は、平成23年度「沖縄県の企業」、平成24年度「沖縄の課題」、平成25年度「マネジメント」となっており、平成26年度は「自分たちが問題とを感じる課題の解決をマネジメントする—管理のサイクルをゼミ活動に活用して—」という共通課題を設定した。

Ⅲ ゼミ活動の具体的内容について

1) ゼミの組織作り

平成26年度前期の大城美樹雄ゼミは、男子学生6人、女子学生4人の合計10人でゼミ活動を展開することとなった。まず、リーダー1人を互選により選出し、中村弥生が選ばれた。また、引き続き副リーダー1人を選出し、山下 楽、そして毎回の作戦会議の議事録を作成する書記1人として兼城瑠菜がそれぞれ互選により選出された。さらに、各ゼミ間の情報共有や発表会などの運営のために運営委員1人、松田麻依が選出された。ちなみに、それぞれの学生を決めるのに、決してくじ引きや、じゃんけんは行わず、あくまでも話し合いで選出することにこだわっている。なぜなら、特に、くじ引きなどで選出されたリーダーは必ず訪れる困難や苦境に立たされると、「自分は望んでリーダーになったのではない」という気持ちから、心も態度も逃げてしまい、最後まで責任を全うすることができなくなるからである。たとえ自ら率先して手を上げることがなくとも、お互いの話し合いで最後は「わかりました。私がやります!」と覚悟を決めることが大事であり、人は自ら決めたことに対しては最後まで責任を全うするものである。

以上、教員が積極的に関わるのはここまでであり、これ以降は、選出されたリーダーを中心に学生が話し合いを主体的に展開した。教員は、あくまでも相談役として会議を見守り、学生が行き詰った場合などに相談があれ

ばヒントを与える役としてサポートしていくのである。その際、たとえ、このまま行けば失敗することが分かっていても、失敗から学ぶことも大きいので、できるだけ見守ることに徹し、教員の関与は最小限にするように心掛けていた。どうしても口を挟みたくなる時でも我慢が必要であり、教育とは忍耐であると考えた次第である。

学生は、さっそく作戦会議を開き、10人を1グループで進めるのか、5人ずつの2グループに分かれて進めるのか話し合われ、両方のメリット・デメリットを考慮しながら審議の結果、今回は10人1グループで進めることになった。

2) テーマ設定

まずは、今期の経営系基礎演習における共通課題「自分たちが問題とを感じる」問題とは何かについて、メンバー内でそれぞれの意見を交換した。名護市が長年抱えている基地問題、閉塞感漂う経済問題など地元名護市や沖縄に関する多くの意見が出る中で、現状を分析した結果、名城大学が存在する名護市内には急激な人口増を抱える地区があり、それに伴う問題を住民と一緒に解決することを通して地域貢献を図ることをゼミのテーマに設定することになった。当然であるが学生は学生である前に市民生活を営む地域住民でもあるので、それぞれが暮らしているアパートおよびその周辺での体験から、宇茂佐区「あだね川公園」がゴミ問題を抱えていることが判明し、その解決を図ることになった。宇茂佐区は、ここ数年の急激な人口増加により平成26年3月31日現在、人口が6,496人（名護市公式HPより）となっており、6,811人を抱える宮里地区に次いで、名護市下55ある字の中でも第2位の人口を抱える行政区となった。特に、新興住宅地として名護市が新たに設定した地番「宇茂佐の森」の1丁目～5丁目に約6,000人の人口が集中し、旧集落の宇字茂佐としては諸問題を抱えていることも判明した。旧集落の「宇字茂佐」と新興住宅地の「宇茂佐の森」の融合は区にとっても喫緊の課題でもある。

3) 目標設定

ゼミ活動を通して、どのように地域貢献を成し遂げるのか、どんな地域貢献を達成するのか、について学生同士で話し合われ、「あだね川公園ゴミゼロ大作戦!」と称し、7月30日の最終発表会までには、あだね川公園のゴミをゼロにすることを目標にゼミを展開することになった。しかし、現実にはゴミゼロは困難であるかもしれないので、「できるだけゴミゼロを目指し、それを実現できるよう努力しよう」ということになった。

そのため、公園管理者である名護市、その名護市から管理委託された宇茂佐区、さらには、あだね川公園を

ホームグラウンドに活動を展開している屋部小学校少年野球チームの「宇茂佐サンガーズ」など予想されるステークホルダーを巻き込み、ゴミゼロを目指すことにした。

4) ゼミ活動計画

前項の目標を達成するために、以下の4つが計画された。

- ① ゴミの総量を把握するために定期的に清掃活動を行なう
- ② 宇茂佐地区公民館を訪ね、区長と交渉する
- ③ 宇茂佐サンガーズの監督・コーチと協議する
- ④ ゴミ箱や看板を設置し、設置前と設置後の効果測定を行なう
- ⑤ 公園を利用している子供達に直接その場で意見聴取を行ない、公園内のゴミについての意識調査を行なう

5) 計画の実行

① 清掃活動

1週間ごとのゴミ総量チェックを行なうため、まずは、事前調査を5月10日と11日の2日間で2班に分かれて参加可能な数名の学生により行なった。その結果、ゴミの多さが予想以上であり、対応するためには可能な限り毎週日曜日の午後2時から2時間程度の清掃活動を定期的に行なうことになった。具体的な活動日程としては、6月1日、8日、15日、22日、29日と6月中に合計5回にわたり清掃活動を実施することにした。調査したゴミ総量については紙幅の都合で全てを紹介できないが、一例を挙げると、6月15日（缶12本、瓶1本、ペットボトル7本、買い物用ビニル袋11枚うちコンビニ9枚、プラスチックゴミ66個、可燃ゴミ45個）となっている。また、公園内の公衆トイレの汚染状況がひどく、これも自主的に清掃した。

② 区長との交渉

5月21日に宇茂佐区公民館に於いて、岸本敏宏区長とゼミ生との間で意見交換会が行なわれた。話し合いの結果、岸本区長から「あだね川公園のゴミ問題には区として頭を悩ませていたので、とてもありがたく助かります。名桜大学の学生さんが一緒に取り組んでくれるのは大変うれしい。区としてゼミ活動に最大限のサポートをお約束します」との言葉を引き出すことに成功した。具体的には、ゴミ袋やゴミハサミなどの清掃用具の貸し出し、看板やゴミ箱設置用の木材、塗装用にペンキ、刷毛などの材料の提供などである（写真参照）。

また、6月24日は宇茂佐区公民館に於いて、宇茂佐子供会の役員会へゼミ代表として学生3名（福本貴行、棚原優耶、上間大地）が参加し、意見交換を行なった。入

南風野 毅（いりはえの たけし）会長から、「今回、学生から報告されたゴミの多さに驚いている。是非、夏休みのラジオ体操を活用し、集まった子供たちで、あだね川公園の清掃を行ないたい。また、ちょうど良い機会なので、あだね川公園だけでなく宇茂佐区内の他の公園でもラジオ体操で子供たちが集まるので、子供会として定期的に清掃活動を展開していきたい。子供達には自分達が普段利用している公園のゴミ問題を通して環境教育を広げていきたい」との回答を得た。さらに、入南風野会長から、「あだね川公園の周辺には自動販売機が設置されており、その自動販売機が出所であるとみられるゴミも多数見受けられるので、できれば、その自動販売機設置会社に交渉してゴミ箱を設置してもらおうよう交渉してはどうか」と助言されたので、さっそく対応することにした。

③ サンガーズとの協議

6月30日に宇茂佐サンガーズの監督、渡口 治氏との間で、意見交換会を開催した。席上、サンガーズがこれまでも取り組んできた、あだね川公園の清掃活動について細かい報告を受け、取り組み状況を理解した。宇茂佐区からは公園管理費として年間3万円を提供され、それを基に活動していることも知ることができた。さらに、そのような取り組み状況でも周りからは土日は練習試合や大会などで出かけることが多いため、清掃していないと思われることに悩んでいたことがわかった。サンガーズとしても普段、あだね川公園をホームグラウンドとして活用させてもらっているのも恩返しの意味も込め、中心となり今回のゴミ問題には取り組んでいく所存であること、そのためにゼミ活動への協力を惜しまないことが確認された。

④ ゴミ箱や看板の設置

6月18日に開催された作戦会議において、メンバーの一人である福本貴行から、予てより交渉を続けていた名護市の担当者との看板およびゴミ箱の設置申請について、「不許可」とする回答があった旨、報告された。その不許可理由は、a) ゴミ箱を設置すると公園の付近住民から生活ゴミが持ち込まれる可能性が大きいこと、b) 今回設置したゴミ箱を撤去後の状況に責任が持てないこと、などであった。今回の活動は、学生が中心となり付近住民とも対話を続け、協同しゴミ問題の解決へ向け歩み出したところであったため、学生の落胆は大きく、ゼミ活動の最大の目標である「ゴミ箱設置前、設置後の効果測定」というゴールを失ったことにより心が折れそうになり、ゼミ活動そのものの継続が危ぶまれたほどであった。実際、学生の間では、新しいテーマを今から急



あだね川公園の様子（ゼミ活動前）



あだね川公園の公衆トイレの様子（ゼミ活動前）



公園内のゴミ



なぜか布団も捨てられていた



学生による公園内の清掃活動



学生による公衆トイレの清掃活動



落書きされた案内板の裏側



落書きを消すためにペンキを塗る学生



清掃活動の成果①



清掃活動の成果②



清掃活動の成果③



あだね川公園での夏休み期間中のラジオ体操の様子



宇茂佐公民館での岸本敏宏区長との話し合い



宇茂佐区より提供された清掃用具など



公園前のお店（グリーンマート）の外観



グリーンマートで販売されていたかき氷



宇茂佐サンガーズによる清掃活動の様子



公園内の東屋の様子

いで設定し、修正しなければ最終発表会に間に合わないのでは、という意見すら見受けられた。

⑤ 公園利用の子供達への意識調査

実際に普段から公園を利用している子供達は、ゴミ問題をどのように捉え、どのように考えているのかについて、意識調査を行なうことにした。その際、アンケート用紙などを用意しても、相手が小学生やそれ以下の児童である可能性が高いので、あえて紙によるアンケートではなく、その場で口頭による説明や質問を行なう形式を取ることにした。それによると、以下のようである。

実施日：6月22日（日）公園清掃後に行なった。

公園内のバスケット（3 on 3）を楽しんでいた生徒 13人
サンガーズの子供達 7人
サッカー部の子供達 5人
合計：25人

質問1：公園内のゴミは多いと思うか

- ①多いと思う（25人） ②思わない（0人）
（中には、犬の糞も多いとの回答もあり）

質問2：公園内にポイ捨てをしたことがあるか

- ①ある（25人） ②ない（0人）

質問3：なぜ、ポイ捨てをしたのか（自由回答）

- ・持って帰るのがめんどうだから
- ・ゴミ箱が無いから
- ・考えたことがない

質問4：ゴミ箱があれば、ポイ捨ては減ると思うか

- ①減ると思う（25人） ②減らないと思う（0人）

質問5：ゴミ箱は、どこに設置すると効果があると思うか（自由回答）

- ・公園の入り口
- ・座れる場所（東屋）
- ・その両方とも

質問6：何か言いたいことがありますか（自由回答）

- ・トイレが汚い
- ・トイレトペーパーが1つもない
- ・看板を外からも見える位置に設置したらどうか
- ・近くの駄菓子屋（グリーンマート）に、ゴミとなったかき氷のコップを拾って持っていくと、かき氷がもらえる（いつもではないらしい）
- ・時計を設置してほしい

・水道の水がぬるい

以上、口頭による聞き取り調査の結果であるが、100%の子供達が公園内のゴミは多いと認識しており、また、100%の子供達がゴミ箱を設置すればゴミは減るとの認識であった。母集団の数は少ないので参考意見ではあるが、興味深い結果であった。さらに、自由回答での「その他」においては、子供なりに公園を良くすることを日頃から考えており、的確に改善策まで検討していることも分かった。駄菓子屋のグリーンマートは、公園に隣接する駄菓子屋として、公園内のゴミ問題には敏感に反応しており、少しでも子供達にゴミを片付ける意識を育てようと、駄菓子屋からの出所と思われるかき氷の発泡スチロール容器がゴミとして散乱していた場合、子供達がそれを拾って駄菓子屋に届けると、そのゴミと引き換えに新しい容器にかき氷を入れて無償でプレゼントする活動をすでに展開していたことも、子供達への聞き取り調査で判明した。

6) 活動のチェック

平成26年度前期の経営系基礎演習では、PDCA（Plan, Do, Check, Act）の管理のサイクルをゼミ活動に活用することもテーマの一つであったため、自分達の活動をCにあたるチェックを行ない、軌道修正を図った。特に、今回のゼミ活動ではゴミゼロ達成は困難であることが予想されたことから、より正確なデータを収集するため、汗をかきながらの清掃活動によるゴミの総量チェックと、そのデータを基に、看板・ゴミ箱設置による効果測定が最大目標であった。ところが公園管理者である名護市の許可が下りなかったことにより、最大の目標を見失い、目標設定に対する軌道修正を余儀なくされた。そこで、せっかく行なった清掃活動による総量チェックのデータを最大限生かし、現在、自分たちが中心となって展開しているゴミゼロ作戦を、サンガーズを中心としたステークホルダーによる連絡協議会のようなものを立ち上げてもらい、そこへと引き継いでもらうことを目標とすることに再設定した。

7) アクションプラン

- ① 残りのゼミ活動期間を最大限活用し、まずは自分たちが円の中心となり、円周上のステークホルダーに働きかけ、あだね川公園のゴミ問題について共通認識をもってもらおう（図1）。
- ② 次に自分たちの位置に、サンガーズが入り、今後ともあだね川公園のゴミ問題について継続して取り組んでもらい、できるだけゴミゼロ公園を目指してもらおう（図2）。

以上、今後は2つのステップをPDCAのAとしてのアクションプランを立て、推進することになった。

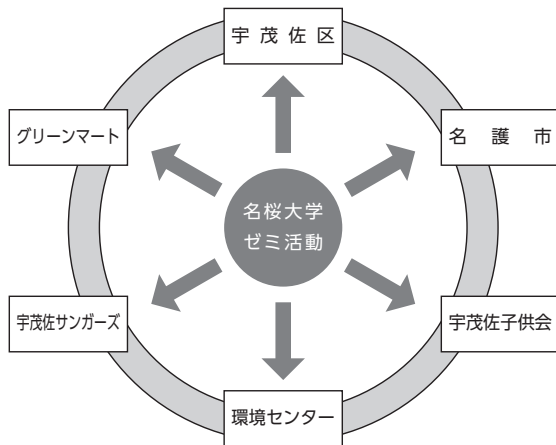


図1 名桜大学ゼミ生が中心となって形成された連携図

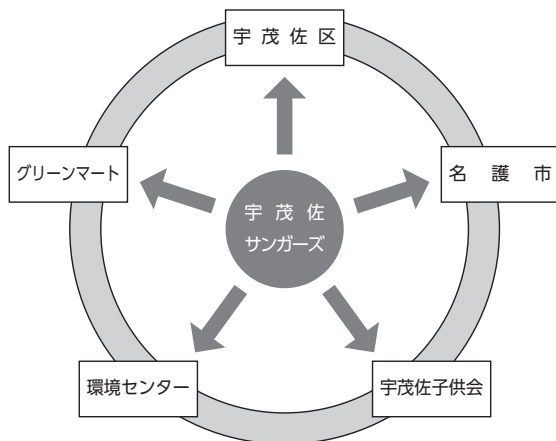


図2 宇茂佐サンガーズを中心とする目指すべき連携図

8) 再実行

アクションプランを進めるべく、宇茂佐区・宇茂佐子供会・宇茂佐サンガーズ、そして、あだね川公園の目の前にある駄菓子屋グリーンマートも協力し、ゴミ問題について取り組むよう話し合いを続け、一定の道筋を作ることができた。今後は、宇茂佐サンガーズの保護者会が中心となり、この問題に取り組んでいくことをサンガーズ側から回答された。ただし、平成27年3月に開催される保護者会において決定される次期保護者会長予定者（正式決定ではないので名前は差し控える）が、責任を持ってゼミ活動が無駄にならないよう展開していくことを約束してくれた。

9) 活動の成果

学生が紆余曲折ありながらも、地域と連携しながら、あだね川公園のゴミ問題に正面から取り組み、実際に清掃活動を通してデータを収集し、最後は一定の成果が得られたと思う。途中で最大の目標を見失いかけた時はゼミ活動そのものが心配されたが、PDCAのCとしてのチェックを行ない、それを基にAとしてのアクションプランを立てて、最後まで諦めずに取り組むことができたことが大きな成果でもある。まず、自分達を中心に据えた連絡協議会のような組織を形作り、さらに、その中心に宇茂佐サンガーズを置いて継続的に展開できる筋道を作ることができたことは大きな成果である。

IV まとめ

正課内活動としてのゼミ活動を通して大学生による地域貢献とは、いったいどのようなものであろうか、実際に活動するまでは、いろいろと思い悩むこともあった。しかし、そのような悩みは杞憂に終わるほど、学生は実際に良くやってくれたと思う。今回の活動で言えば、実際に公園のゴミ拾いだけでなく、公共トイレの掃除まで、5週間にわたって嫌がらずに展開してくれたからこそ、関係した地域の方々の共感を得ることができ、協力してくれたと思う。また、教室に閉じこもることなく、出掛けて行き、多くの関係者と実際に顔を合わせたの協議や意見交換を行なえたことも良かった。この場をお借りして、宇茂佐区・宇茂佐子供会・宇茂佐サンガーズ・グリーンマート等の関係者には心から感謝申し上げる。

ところで、名護市には米軍基地問題と言う国際的な問題も存在するが、ここで暮らす住民の身近な問題もそれと同様に重要なのである。「Think global, Act local」を今回のゼミ活動を通して痛感し、PDCAの管理のサイクルの重要性を再認識できたゼミ活動であった。最後になったが、今回のゼミ活動で活躍した、石丸聡子さん・上間大地さん・兼城瑠菜さん・棚原優耶さん・中村弥生さん・比嘉太造さん・松田麻依さん・山下 楽さん・福本貴行さん・座波麻理奈さん、以上10人の学生には心より感謝申し上げる。

追記

なお、本報告書は、愛知東邦大学地域創造研究所編、『地域創造研究叢書』No.22、『学生の「力」をのばす大学教育—その試みと葛藤』（唯学書房）第3部 第12章に掲載された文章に、加筆修正を行なったものである。

注

- (1) 「名桜型リベラルアーツ」については、下記のURLにて参照ください。

名桜大学HP

<http://www.meio-u.ac.jp/facility/liberal-arts-center.html>